新見公立短期大学紀要　第20巻
pp.　183－198,　1999

調査資料

幼稚園・保育園での英語教育の取り組みについて（1）

山内　圭

英語教育

Teaching English at Kindergartens and Nurseries (1)

Kiyoshi YAMAUCHI

（1999年11月10日受理）

本資料は新見女子短期大学（現新見公立短期大学、以下原則的に本学と略す）の幼児教育学科第１期生から第18期生までのうち、幼稚園・保育園等に就職した卒業生などを対象にそれぞれの勤務する（していた）園における英語教育の取り組みについて尋ねたアンケート（資料１参照）の回答結果を分析したものである。またその分析結果について考察を加え、幼児期からの英語教育への取り組みに関する筆者の考え、将来幼児教育者になる学生に短大在学中にどのような英語を身につけさせたらよいかについての私見を述べたものである。

はじめに

近年、早期英語教育への世間の関心が高まりつつある。また、かなり以前から早期英語教育を実施している幼稚園・保育園もあると聞く。

この調査の目的は、幼稚園・保育園における英語教育の現状を明らかにすることである。また、それを明らかにすることにより、将来、就職先の幼稚園・保育園において、英語教育の指導者となる可能性のある、本学幼児教育学科の学生に在学中どのような英語を身につけさせたらよいかの指針も見いだすことができるものと信ずる。

１．アンケートの実施

本学、幼児教育学科を卒業後、幼稚園あるいは保育園（保育所等も含む）に就職した卒業生を名簿で調べ、平成10年３月から平成11年８月にかけて郵送による任意記名式自己記入方法のアンケートに協力してもらった。ほかに筆者の知人の幼稚園教諭２名も含め合計420人にアンケートを郵送し、卒業後長い年月がたったため転居先不明等で返送されてきた数もかなりあり、結局有効回答数は98通であり、回収率は23.３％であった。

また、今回のアンケートでは各園での取り組みをできるだけ正確にありのまま答えてもらうため、幼稚園名・保育園名、その所在地、公私立の別、回答者名は任意記入方式にした。本学の卒業生が複数名在籍する幼稚園・保育園もいくつか存在するが、今回のアンケート方式では幼稚園名・保育園名が未記入の場合、同一園かどうかの判別ができず、回答数が必ずしも幼稚園・保育園数ではないことをお断りしておく。

なお回答総数98のうち、幼稚園についてのものが37、保育園についてのものが61あった。

2．アンケート結果の分析

以下、アンケートの各項目について考察を加えていくものとする。適宜アンケートに書かれたコメントを使用するが、その際意味をできるだけ変えることなく表現を少し変える場合もあることをお断りしておく。

1）英語（教育）の現状

	幼	保
・積極的に取り入れ、それを園児募集の際などの売り物にしている	2	1
・活発に行っている	0	3
・定期的に行っている	7	7
・不定期的に行っている	2	3
・ただいま検討中である	0	1
・関心はあるが、まだ取り組んではいない	5	7
・関心がない	16	36
・その他	8	8
・計	40	66

この項目については一番当てはまるものに○をつけてもらう形式であったが、複数回答した者もおり、幼稚園・保育園とも計が総数を超えた。幼稚園・保育園とも関心がないと答えた者が半数近くいた。なお、積極的に取り入れ、それを園児募集の際などの売り物にしていると答えた者のうち、幼稚園については２例とも私立、保育園の１例については公私立の別は不明であった。

「積極的に取り入れ、それを園児募集の際などの売り物にしている」「活発に行っている」「定期的に行っている」そして「不定期的に行っている」と答えた回答を英語教育を行っているものと考え、それが総数に占める割合は幼稚園においては27.5％、保育園においては21.2％であった。取り組みのレベルも様々であり、また英語教育を行っていないため返送しなかった者もいると思われるので数値的にもやや正確さに欠けるのではあるが、幼稚園においては約４園に１園、保育園においては約５園に１園が何らかの形で英語教育を行っているということになる。これは、筆者が調査前に想像していたより高い割合であった。

「その他」を選んだ者のなかには、「モンテッソーリ教育を取り入れているため、特に英語教育はしていません」というように、モンテッソーリ教育を理由に英語教育を行っていないと答える幼稚園の回答が３例見られた。これは、子供の自発的活動を重視するモンテッソーリ教育ゆえ、集団活動となりがちな英語活動は行いにくいと考えていることによると推察できる。ただ、モンテッソーリ教育が外国語教育を否定しているわけではないと思うので、全国にかなり数多くあると思われるモンテッソーリ教育を行っている幼稚園・保育園のうち、英語教育を行っているところもいくつかはあるのではないかと推測される。モンテッソーリ教育と英語教育との関連性については今後の課題としたい。その他に、「音楽・絵画の方に力を入れていた」という回答も見られた。

また、「その他」の項目の保育園の回答としては「国際交流・文化交流という点では取り入れたいが英語（語学）としては不要に思う」というものも見られた。この点についての筆者の詳しい意見は後述するが、この回答者のコメントを換言すれば、英語やその他の外国語を使っての国際交流・文化交流を行いたいが、言葉を知識として学ぶ英語教育は不要だという考えであろう。その点は筆者も考えは同じである。今回のアンケートで「英語教育」という言葉を使用したため、「英語教育といってもあまり本格的なものばかりではなく、英語にふれることを目的とするもの（例えば英語の歌を歌う、英語のビデオを見る、英語の絵本などを教室に常置するなど）も含まれます」ともアンケート中に書いたのにも関わらず、何人かは「英語教育」という言葉で自分たちの多くが中学校以来受けてきたであろう主に知識としての英語教育を思い浮かべてしまったようである。この点、「英語教育」という言葉を「英語（を使用しての）活動」「英語にふれること」などとしておけば筆者が考えていた意味が、回答者に伝わりやすかったかもしれない。

他のコメントとしては「一切、早期教育はしておりません」「文字教育は一切行わない方針」「あいうえおも教えない」などのものも見られた。

また、英語教育に関心はあるが、現在英語教育を取り入れていない場合、どのような条件が満たされれば、英語教育に取り組み始めると考えるかについても尋ねてみた。

・保護者の要望
・外国人の子供が入園してきた時
・外国人の入園希望が多くなった時など
・外国人の子供が入園して、どうしても英語を使わざるを得ない状況にならない限り、取り組みは始まらないのではないかと思う
・人材
・英語のできる人が入る
・英語に自信があり、保育に取り入れようと思う人がいれば
・英語の遊びや歌などを子供達と一緒に行える人がいれば
・外国人講師が常勤
・定期的に外国人と交流を持てればよい
・保育者への講習
・もう少し正しい発音を知ってからでないと保育者が担当するのは困難ではないか
・楽しい教材
・英語教育についてみんなで話し合う時間がほしい
・英語教育のマニュアル
・小学校・中学校と一貫性のある教育という点で、英語学習の必要性がでてきている。この現状を多くの人に知ってもらうのが、安心して英語教育を始められることにつながると思う
・正しい日本語を子供達が使えるようになってからが前提なので取り入れることはないと思う
・モンテッソーリ教育が根づき落ち着いたら取り組まれるかもしれない
・条件として、家庭、またその子供を取りまく環境が子供を一人の大切な人間として考え、育てていること。それができていない限り英語教育よりも必要なことはたくさんあるはずである。
・将来的には幼児期から、そのような教育が必要となってくるかもしれないが、今は教育よりも子供が一人一人の個性が伸ばせるような保育、幼児期でしか経験できないのびのびとした遊びを通して保育している。私個人としては教育よりも、たくさんいろいろな遊びを経験させてやれたらと思っている
・今のところ、全く関心なし。スイミング・伝統芸能・茶道に力を入れている
・英語にはシスター達がとても興味を持っている。しかし現在、課外活動として音楽や体育教室を実施しているため時間的に無理かもしれない
・公立なのでわからない
・公立幼稚園なので何か特別な要望があるか、上からの要求があったり、教育課程の変更などがあると取り組むでしょうが、あえて取り組めるかどうかはわからない

多く見られた条件としては、（英語を話す）外国人の子供の入園と英語に自信がありそれを保育に取り入れようという意欲がある人の就職があった。また常勤の外国人講師、保育者への講習、楽しい教材、英語教育のマニュアルなどの環境面の整備を求める声も見られた。また英語教育に対して否定的なコメントも見られ、英語教育以前により大切なことがあるとする考えも見られた。

英語教育が始められる条件として外国人子女の入園が多く挙げられた。そこで実際、外国人の園児（日本人とのハーフを含む、以下同じ）の在籍と英語教育との関連性を調べてみた。外国人が現在在籍すると答えた幼稚園の者は7名、保育園の者は14名であったが、それぞれの園の英語への取り組みの現状は下記のようになる。

	幼	保
・積極的に取り入れ、それを園児募集の際などの売り物にしている	0	1
・活発に行っている	0	1
・定期的に行っている	1	0
・不定期的に行っている	0	1
・ただいま検討中である	0	0
・関心はあるが、まだ取り組んではいない	1	3
・関心がない	4	7
・その他	1	1
・計	7	14

この結果を見ると、絶対数は少ないものの外国人の園児が在籍することと、その園で英語教育が取り組まれることの間には必ずしも密接な相関関係がないことがわかる。これは、外国人の国籍あるいは出身地が英語圏でない場合が多いことによると思われる。現在および過去に在籍した外国人園児の国籍あるいは出身地として挙げられた国を列挙すると、アメリカ合衆国、イタリア、韓国、ケニア、スーダン、中国、朝鮮、ネパール、バングラディッシュ、フィリピン、ブラジル、フランス、ベトナム、ペルー、マレーシア、モンゴルとなっており、英語を母語とする園児はどちらかというと少数派のようである。

実際外国人の子供が在籍する場合、外国人の子供（親）と接するときに使う言語についても尋ねてみた。その回答は以下のようであった。

・日本語
・在日韓国人の夫婦が一組いるが、日本語が上手なので全て日本語で会話
・現在はいないし、いた場合も親子とも日本語が理解できた
・以前、ハーフの子供を担任していた時、子供は日本語を話す、親は手紙が読みにくかったので、電話でお知らせをした。
・母親がフィリピン人の方が２名いるが、日本語がとても上手。漢字が読めないのでひらがなで連絡したり、個人的にお知らせをする
・ブラジル人の母親から頼まれたので連絡帳にはローマ字でそのまま日本語を書いている。子供に対しては身振り手振りと日本語で語りかけながら生活していてかなり通じだした。
・ゆっくりと日本語で話したり、書いた物を父母の知人に訳してもらい伝えてもらう
・親に日本語で頑張ってもらうことが多い。それでもだめなときは互いの歩み寄りと心が一番大切だと思う
・ほとんど日本人の子供と同じ言葉で接している。時々英語で話すこともある（単語程度）
・日本語と簡単な英語（単語だけ）
・日本語の場合は標準語で話した。英語の場合は相手が理解できるまで様々な言い方を試みた
・親には日本語＋英語＋ジェスチャー＋最後にはスマイル。子供には日本語でわりと伝わる。子供同士では何語でも伝わるようだ
・英語と日本語
・その人が英語話者なら慣れるまで、英語を使うでしょう。今まで私の園では経験がなかった
・４年前、ブラジルから来た子供がいた。毎日の連絡帳で１日の出来事などを伝えるのに辞書を見ながら書いた。ブラジルはポルトガル語だが日本語より英語の方が伝わった
・昨年度、中国人の子供を受け持ったが母親とはほとんど筆談。子供とは日本語でコミュニケーションをもっていた。互いに通じ合い、苦労することはなかった
・父母が中国残留孤児で日本の両親の元にもどってきた中国の子が在籍した時中国語を少し勉強した。入園してきた時に父母・子供共に日本語が全く話せなかったので、「ごはん」「おしっこ」などの生活面の言葉を覚えた

最も使用されている言語は日本語であった。それで不自由な場合は英語・ローマ字・ひらがな・ジェスチャー・その人の母語などの助けも必要になるというのが現状のようであった。

また、外国人の子供（親）とのコミュニケーションで困る点についても尋ねた。

・言葉がうまく通じない
・書き言葉（文字）が相手に通じない
・フィリピン人の母親がいて子供の様子を伝えるのが日本語で難しかった。自分自身が英会話が少しでもできていればと思った
・以前母親が外国の方がいたとき、細かい連絡は父親としていたが、思いを伝えたくて、辞書を片手に手紙を書いたが、実力が伴わなかったので、思いばかりあせってしまった
・お互いかたことでコミュニケーションするので、よくわかるように伝えることが難しいことがある
・意思疎通が難しい。こちらの思いが通じにくかった
・子供の状態など知らせたいことがうまく伝え

られない
・けがをしたときや体調を崩したとき、お互いその状況を説明したり理解しにくい
・子供がけがやけんかをして泣いているとき、話を充分に聞いてやれない
・外国人の子供を相手にする場合、一番困難に思ったことは、なぜ注意しているのかということを上手に伝えられないこと。だから、子ども相手の簡単な日常英会話ができればよいと思う
・字がわからないので連絡帳が使えない
・やはり言葉に困る。こちらの意見は本などを見ながらでも伝えようとすることはできても、リスニングができず、相手が言っていることが理解できないのは大変
・家庭では英語で話している子供の場合、園では日本語なので言葉が出るのが遅い
・なかなか思いが伝えられないという面もあるが、外国の人は日本の文化に触れることができるということで喜んでいる
・言語と文化の違い
・習慣の違い
・価値観の違い
・日本の常識と外国の常識の違い
・最近は英語圏の子ばかりではなくモンゴルや韓国、バングラディッシュなどのアジアの方の子もよく来る。近所に医大があり留学で来る人の子が入園する。留学生である父親や母親は英語は話せても、その配偶者は英語が話せず、母語を話すことが多い
・ブラジルから仕事で日本に来ている方々の場合、大体長くは定住せず、日本各地を転々とすることが多い。ポルトガル語も自分でも単語くらいはとは思うが理解する間もなく、子供の方が引っ越してしまう。（現在、今の園に４年近くいるがブラジルから来た子は４～５人、期間は各々違うが長くて４～５ヶ月、短いと１ヶ月で県外に転園する）
・以前ブラジルの子がいたとき、食事が全く受けつけられず、コーラしか飲まずに困った

ということで、外国人子女が入園した場合、最も困るのはやはり言葉の壁であるようである。日本語でのコミュニケーションに限界があるとき、相手の母語がある程度できれば理想的であるが、その次に有効なのは英語といえるようである。

２）具体的内容

どのような内容の英語教育を行っているかについても自由記入方式で書いてもらった。

幼稚園においては、英語の歌、あいさつ、ゲーム、ダンス、手遊び、ぬりえ、カード遊び、絵本読み、英語でのマーチングなどの遊び的な活動を行うという回答が多く見られた。その他、地方自治体の英語指導助手などが月１回程度幼稚園を訪問し園児と一緒に遊んだり、給食を食べたりするなど外国人との交流の機会を持つというような回答も見られた。また、絵本の部屋に数冊英語の絵本を置いている園もあった。

先ほどふれた英語を積極的に取り入れ、それを園児募集の際などの売り物にしている幼稚園の一つでは、ジオス英会話の講師による週１回のレッスンで、対象児は年中・年長児で、英語の歌を使ったお遊戯、ゲームを行っているようである。

また、世の中にはあらゆる人種と言葉があるということ、髪の色がちがったり、言葉が違うからといって差別をしてはならないという人権教育のほうに重きを置いているというコメントも見られた。また英語に限定せず、幼児の関心や機会に応じて、例えば給食が外国の料理メニューの時、園児（やその家族が）外国旅行をしてきたことを話した時、併設の小学校に留学生が来た時など、世界の言葉に触れる場を持っているとのコメントもあった。

保育園においても、同様に英語の歌、あいさつ、英語で数字や身近なものの名前を覚える、英語のビデオ、ゲーム、ダンス、手遊び、折り紙、園児がよく知っている物語の英語によるパネルシアターといった遊び的な活動が多かった。また、外国人英語指導助手に来園してもらい一緒にプールに入ってもらうと答えた者もあった。いずれにせよ、言葉よりも、はじめに楽しむことを考えているようである。

英語を積極的に取り入れ、それを園児募集の際などの売り物にしている保育園では、週１回アメ

リカ人の講師を招き、簡単な英語を教わったり、それを用いたゲームなどをしているという回答が見られた。

また、講師は30代の経験豊かな日本人女性で、年長児15～16名を１クラスとし、１週間に１回、30分のレッスン。目的と内容は、簡単なあいさつや天気、数字、動物、体、文字など子どもの身近な生活に関して、ゲームや歌、カード、絵本などを楽しむことを通して英語（会話）に親しませること、というコメントも見られた。このように定期的に行っているところでは、週１回という回答が多かった。その他、外国人の先生が月１回訪問してくる、学期ごとに１回地元中学校の米国人教師が訪問するという回答もあった。

別の保育園でも園外（JEMスクール）より外国人教員が週に１度訪問し、１クラス30分程度の教室を行っている。その園では英語のあいさつや歌、ゲームなども取り入れ、プレートを見せて英単語などを繰り返し発音する。５・６歳児クラス（年長）では、ワークブックも使用し、アルファベットの練習なども行っている。４・５歳児クラスも５・６歳児クラスも16名で、30分ずつの授業を行っているとのことである。

その他、希望者のみのECCジュニア教室を行っているところがあったり、保護者に英語教室の先生がいて、ごっこ遊びの中に子供達自身が英語を取り入れたり、朝夕のあいさつを英語でしているところもある。

この項目の回答の中にいわゆる英会話学校の名前が３つ（ジオス、JEMスクール、ECCジュニア）出てきたことは、筆者にとっては驚きであった。これらの名前が出てきた幼稚園および保育園はいずれも私立であり、特に私立の場合においては、外部の英会話教室と提携をしているところもあることがわかった。

また、英語の時間と頻度については週１回、30分とする回答が最も多く、園児の集中力の継続時間、他の活動などとの兼ね合いを考えたらこれが妥当なところであろう。英語を本格的に身につけさせるためには週１回、30分では足りないと思われるのであるが、英語に興味を持たせるためには効果はあるであろう。

３）英語担当者

英語を誰が担当しているかについては次のような回答が得られた。

	幼	保
・園長	0	1
・幼稚園教員	2	−
全員が担当	(1)	
英語の得意な方が担当	(1)	
・保母（保父）	−	6
全員が担当		(1)
英語の得意な方が担当		(4)
年長組の受け持ちが担当		(1)
・外国人教員	4	1
・外国人ゲスト	4	7
・園外より招く日本人の英語教師	5	2
・父母	1	0
・その他	0	0

この数字を見た限りでは、英語を担当しているのは幼稚園教員や保育士といった保育者（なお、アンケートを実施した当初は保育士という名称がまだ正式ではなかったので、保母・保父の名称を使用）よりも、園外から招く外国人の教員やゲスト、そして日本人の英語教員のほうが多いようである。園児にとっては、園外から外国人または日本人の英語の先生がやってくると英語を使うという環境になる、それは確かによいことであろう。しかし、英語に関わる時間はそれらの園外からの先生が訪問した時だけというのではなく、それらの先生の訪問時以外にも保育者が日常生活の中にも英語も使って子どもと接するのがよいであろう。

アンケートの質問事項では外国人教員と外国人ゲストをわけて回答してもらった。実はここで筆者が外国人教員として意図したのは、その園専任（常勤）の外国人教員のことであり、園外から招く外国人はすべて外国人ゲストとするように考えていた。しかし筆者の説明不足のため、園外から招く外国人指導助手(ALT)や英会話教室などの外国人教員を、多くは外国人教員として回答していたようである。ちなみに1995年現在岡山県内の幼稚園および認可保育園における外国人教員の在籍は岡山市内の私立幼稚園と川上町内の町立幼稚園

での各１名ずつのみである[1]。

上記のような理由から、外国人教員と外国人ゲストを併せて考えてみたところ、また、幼稚園と保育園も併せて考えたところ、外国人の数は計16名であり、その出身国の内訳はアメリカ合衆国５名、オーストラリア３名、イギリス、カナダ、ニュージーランド、タイが各１名、不明が４名であった。アメリカ合衆国が一番多かったのは予想通りであった。また、自分の園に教えに来ている（来た）外国人の出身国が不明であるいう者が４名もいたことに一般教員（保育者）の英語教育に対する関心の薄さがいみじくも表れているような気がする。

４）英語を取り入れた場合の子供達の興味・関心・反応

この項に書かれたコメントでの代表的な肯定的コメントを箇条書きにしてみる。なお、ここでは幼稚園・保育園のものを併せて取り扱っている。

・とても楽しく英語に取り組んでいる
・交流会では外国人に興味を持って接していた
・外国人にふれることを喜んでいる
・外国人が引っ張りだこだった
・手遊びも言われることを必死で聞いている姿が見られた
・大変興味を持って歌や単語を覚えている
・親しみやすい身近にある単語を使っての遊びだったのでとても興味を持って参加していた
・目を輝かせて喜んでいる
・遊びを通してふれ、生き生きと活動している
・レッスンを楽しんでいる
・遊び感覚で楽しんでいる
・比較的喜んで取り組んでいる、特にゲームには興味を持って楽しんでいる
・英語教室などに通っている幼児も少なくなくて、興味関心を持つ子供が多い
・『英語であそぼ』などのＴＶ番組を見ているのでスムーズに接している
・年長ともなるとだいぶ記憶もでき始め、先週習ったことを覚えている子が多い
・覚えるのも早い
・子供達は先生が来られると喜ぶ
・とても興味を示し、楽しみにしている様子
・先生がやさしく楽しいので人気がある
・話や表現の上手な外国人なので楽しんでいる
・日本と違った習慣に興味をもって質問する幼児もいる
・「ほかの英語の歌も教えて」と積極的
・外国人ゲストとはすぐ友達になり、近くに住んでいる子はよく遊びに行かせてもらっている

というように、肯定的なコメントが非常に多く見られる。だが、必ずしも全ての子どもが楽しんでいるかというと、そういうわけでもないようである。それがわかるコメントも次に紹介する

・興味を持った子は、机や椅子などを指差して「これ英語で何て言うの？」と聞いてきたり英語の歌を何度も歌ったりしているが、関心の無い子は、皆で歌を歌う時は歌っているが、その他は特に英語にふれようとする姿は見られない
・反応はとても良く英語の先生が来ると真剣な顔つきになる。反対に関心のない子は、無反応で別のことをしている。半分以上の子供は楽しく英語を教わっている
・全く興味を示さない子もいるが、比較的人気のある活動だと思う

上に紹介した３つのコメントに見られるように、必ずしも全員が英語に対し興味を抱くとは限らない。したがって英語は必ずしも全員でやる必要はないと考え、週に１度、５歳児（希望者のみ）を対象とし英語教室を行うというところもある。

次に、英語を取り入れる際に苦労する点について尋ねてみたのであるが、その回答をみてみたい。

・自分自身の英語力が不安
・発音が悪いので話せないこと
・正しい発音ができない
・自分が英語を教えるとき、間違った英語を使っていないかということが不安になる
・保育者の英会話力が必要（レッスン時だけの英語よりも日々の生活や遊びの中で、習ったことをくり返していくことが子供の興味・関心を大きく育てる）

・外国人講師が英語で話した場合、子供達に通じないことがあるので保育者の補助が必要
・外国の行事の由来などを知らないこと
・基本的な活動そのものを体得している途中の子供達であるので、幼児の扱いに慣れている講師でないと（子供の）集中力が続かない
・中学校に進んだ時、英語の学習が有利になると考え、知識としての英語の力を求める親が出てくること
・教材がないこと
・どのように導入していけばよいかわからない
・雑務に追われて、自分自身の英語の勉強や準備ができない

最も多く書かれていたのは、保育者自身が自分の英語、特に英会話力と発音に対して不安を抱いていることのようだ。教材を揃えたり、雑務の時間をできるだけ減らすなど環境面の整備も必要であるが、最も大切なのは、保育者に英語に対して自信を持ってもらうことのようである。松香洋子氏も「幼稚園の先生と小学校の先生、自分の実力で子供たちに英語を教えてください」と主張している[2)]。

5）使用教材

次に使用教材について尋ねてみた。教材は使わないという回答も多かった。または英語の先生にまかせているのでわからないという回答も見られた。具体的に記入されていた使用教材は次のようであった。

中田利津子，K. Frazier *Let's Go 1 Student Book* Oxford University Press

S. Wilkinson，中田利津子，K. Frazier *Let's Go 1 Workbook* Oxford University Press

『それいけ！アンパンマンえいごランド』ビデオ　リンガフォン

まなぶくん

「メイジー」の絵本シリーズ（動く絵本）

トーキングカード

ビデオ

英語の歌のカセットテープ

カード

プリント

ぬりえ

アメリカの幼児向け学習本のようなもの

はじめの２点、オックスフォード大学出版局の *Let's Go* シリーズはレベルが Starter から level 1 - 6 とあり、全部で７段階にレベル分けされており、回答してくれた保育園では５・６歳児に対して二番目にやさしいレベル１を使用しているとのことであった。この教材は色がとてもカラフルであり内容も豊富であり、また付属のワークブック教材もあり、使用しやすそうである。また、この教材は株式会社アルクが児童英語教師246人に対して行ったアンケート調査の一項目、使っているメインテキストについての調査[3)]でも第２位に入っている。同調査の第１位は所属組織のオリジナル指定教材であったので、この *Let's Go* シリーズは一般教材としては最もよく使用されているものの一つである。

これらの教材については感想も尋ねているので、それを挙げてみる。まずは*Let's Go 1* であるが、これを使用している保育園でやっているのはアルファベットの練習が主な内容のようなので、この教材はまだ少し難しいようである。『それいけアンパンマンえいごランド』については１歳児クラスの子供も興味深く見ているようである。まなぶくんについては、英語だけではなく数字や文字も楽しく学ぶことができるようである。子供達の大好きなゲームと同じようなので「ゲームしよう」と喜んでいるとのことである。勉強のようで遊びという感じと書かれていた。動く絵本に関しては、内容がすべて英語でも（日本人の）保育者たちも楽しく理解することができ、子供達にも人気があるとのことであった。トーキングカードとビデオも子供達の気を引く楽しいものだったとのことである。英語の歌のカセットテープは、リズム体操のようなものも用意されていて、子供達の興味を引くのには効果があると思うとのことだった。プリントについては、子供達もよく知っているセサミストリートを用いたプリントなので興味を持って取り組んでいるということである。また、ぬりえについては、楽しく英語の色を覚えることがで

きてよいと思うと書かれていた。

いずれにせよ、幼児の興味を引くということが大切なことで、その上英語が楽しく学ぶことができるようなものが工夫されて使われているようである。

次にどんな教材が望ましいかについても尋ねてみた結果を箇条書きに記す。

・子供達が遊びながら親しみ覚えていかれるもの
・親しめるもの
・子供の遊び、日常の生活と関連のある内容の教材
・子供が興味をもつもの
・子供達が興味を持つようなもの（ディズニー等）で引きつけて指導するとやりやすい
・子供達の興味を引くアニメ的なもの
・絵がついているもの
・遊び・ゲーム感覚でできるもの
・色ぬりやゲーム感覚で学べるもの
・あまり「勉強」というような教材はどうかと思う
・子供が喜んですればよい
・書くよりも見たり聞いたり話したりの方がよいと思う
・見る、聞く、触れるもの
・歌だけや難しい単語ばかり出てくるものよりも英語で歌えなくても手遊び（動作）をしたりするものや、くり返し同じ英語で歌えるような曲などの方が望ましいと思う
・音楽・ビデオ・絵本等が取り入れやすいのではないか
・テンポのよいわかりやすいもの
・『英語であそぼ』等、英語をわかりやすく説明したもの
・簡単なもの

以上のコメントの中からキーワードを拾い出すと、「親しみ」「遊び」「興味」「ゲーム感覚」「見る、聞く、話す、触れる」「簡単（わかりやすい）」などとなろう。幼稚園・保育園で使いやすい教材は、それらの条件を兼ね備えたものであると考えられる。

6）日本人保育者の英語研修

英語を日本人の保育者が担当する場合、たとえそれが幼児向けのごく簡単と思われる英語であったとしても、教える側が日頃から英語に触れていること、英語を勉強していることが望ましい。そこで現在英語を担当している、または将来担当する可能性がある場合、保育者が普段どのように英語の自己研修をしているかについても尋ねてみた。その回答を以下に示す。

・朝、あるいは夕方、子供達と一緒に『英語であそぼ』の番組を見ながら歌ったり、発音している
・県北部の各町内に所属しているALTの集い（教育委員会や教育事務所主催のもの）に参加し、一緒に料理を作ったりパーティーをする中で交流をしている
・教育テレビの英会話を見ている
・英会話カセットを聴いて耳を慣らしている
・日常会話を主に載せている単行本を声に出して読むようにしている
・英会話に通っている。それは欧米の文化に興味があったからと、旅行の時に役立てたかったから。(それを子供達に教えることはほとんどない)
・(今のところ英語を担当することはないが)英会話には興味があり、時間があれば習いたいと思うので、英会話のテレビなど時に見ている
・特に英語を担当するというようなことはないが、年長児クラスが英語をしているので、時々、その様子を見せてもらったり、その外国人の先生と少し話す機会があるくらい
・時々だが（幼児向けも含む）英会話のテレビ番組やビデオを見る（勉強しているという意識はあまりなく、なんとなく漠然と見ていることが多い）
・ほとんど勉強はしていないが、映画を見たり、音楽を聴いたりはしているので、英語には接していると思う。わからない単語、気になる単語はいつも辞書をひいて調べたりはしている
・カセットを聴いたり辞書で発音を調べたりし

ている
・ヒアリング・リーディングの機会を持つ
・歌のカセットを聴く
・昨年、担任として補助についていたときには、指導するというより子どもに、きちんと話を聞くように促したり、興味を持つようにリアクションをとったりといった程度であったので、特には勉強したりはしていない。が、いつも決まって行うあいさつや歌、手遊びなどは覚えるようにしていた。
・以前、日本語が全く分からない保護者がいらっしゃった際に少しばかり勉強した（連絡帳に書く程度）
・特に難しい英語は用いてなく、中学校で習った程度の英語なので勉強は特にしていない
・自分の生活に追われなかなか勉強できていないのが現状
・ほとんど勉強していない
・特に勉強していない

たとえ扱う英語は簡単であっても、言葉というのはその操縦力を保つためには常にふれている必要がある。そのため自己研鑽はとても重要なことである。ただ、保育者は園児が帰宅した後もいろいろな雑事があり、自分の生活もあり、コメントの一つに見られたように「自分の生活に追われなかなか勉強できていないのが現状」といったケースが多いであろう。そのような場合には別のコメントに見られた「朝、あるいは夕方、子供達と一緒に、『英語であそぼ』の番組を見ながら歌ったり、発音したりしている」という方法が、保育と英語の自己研鑽を兼ねているので理想的である。また、この方法を園児の家庭の協力も得て家庭でも保護者に『英語であそぼ』などの幼児（児童）英語教育のテレビ番組やビデオを子供達と一緒に見てもらうのは子供達が英語にふれる時間を増やすという意味でも、家庭でも英語にふれる雰囲気を作るためにも効果的である[4]。

7）学生（生徒）時代で習うべき英語

アンケートでは、現在英語を担当している場合、あるいは将来担当する可能性がある場合、学生（生徒）時代に習った英語で役に立っているのはどんなことかについても尋ねてみた。

・学生時代に習った英語の歌が（幼児英語教育）番組でよく出てくるので懐かしく、すぐにとけ込める
・身近な英語
・身の回りの単語（子供にヘビは？カメは？などきかれることが多い）
・日常生活に使われやすい単語
・中学校くらいで習った単語や英会話
・日常英会話が役に立つ（外国人教員とコミュニケーションをとるためにも）
・外国の行事・生活習慣について
・日本の子供達の遊びをどのように英語で表現するかを教えてもらったこと
・英語の基礎
・単語
・会話
・長文を訳すことによって辞書を引く癖がついた。
・いろいろな単語を覚えたり、文章を読むことが多かったので、本や新聞を読み、なんとなく意味がわかる
・シェークスピアの本を元に学んでいたので、現在はほとんど役に立たない
・幼児教育に関係したものはあまり習わなかった。一般教養としてのものだったので役に立つところまでいかない
・あまり役立っていないような気がする
・あまりなし
・特になし
・なし

また、どのような英語を学ぶべきかについても続けて意見を書いてもらった。

・英会話
・日常英会話
・ある程度話せるようになりたい
・学生の時、机上の学習だけでなく、実際に言葉を交わしたりして、生の英語を身につけていくことが大切

・文法や文章ではなく、会話をすることができるような授業が望ましいのではないか
・（子供向けの）実用的で簡単なよく使う英会話
・外国人の先生との会話がもう少しスムーズにできるような英会話
・簡単な英会話（外国人の子供の園での様子を伝えるのに困った）
・一般的あいさつや英単語
・簡単なあいさつ・自己紹介
・私が学生だった頃は、難しい単語が山と出てくる本を、買わされたぶ厚い辞書で調べてひたすら和訳という方法で学習していた。真剣に取り組んでいる者はほとんどいなかったように思う。私が今、強く感じるのは生きた英語に触れていなかったということ。自分が英語を喋るという喜びや楽しさを知らないので、子供達に伝えられない。手段がない!! とりあえず実践的な会話を中心に学ぶことができればよいと思う
・ネイティブ・スピーカーとのコミュニケーションを通して学ぶ英語
・発音が美しくできるように、本物の英語に触れること
・正しい発音
・少しの違いで全く別の意味になってしまうので、やはり発音が大事
・リスニング
・自分が楽しんで学び、覚え、子供達が親しんでくれるような英語を
・どのようなというより、興味・関心を持って学ぶべきだと思う
・保育者が英語を好きになること
・英語を使ったゲームの進め方
・英語の手遊び・ゲーム・歌
・子供の好きな歌・手遊びなどをしてほしい。日本語のものと同じくらいレパートリーがあれば、いざという時でてくるのではないかと思う
・子供が興味を持つこと（例えば単語や日常会話やよく知っている歌）を学んでストックしておくと、現場で役に立つと思う。保育技術とからめて指導法も身につけられたらと思う
・ペープサートなど目に訴えるものもよいのでは
・『英語であそぼ』や『セサミストリート』
・『英語であそぼ』のようなテレビを見て、生徒として見るのではなく、このような教え方をするには、教育者はどう動けば、伝えればいいかという視点で見ていくと実践に役立つと思う
・外国文化
・基礎的な項目は中学校・高校と既に学んできているのだから、具体的な教材（子どもの生活や遊びの中でごく自然に見られるもの）など取り入れられたらよいのでは
・表現力
・日本語英語・受験英語にならないように
・英語に限らず世界にはいろいろな文化やならわしがあることにふれる

以上、学生（生徒）時代に習った英語で現在役に立っていることとして多く挙げられていたのは、歌・身の回りの生活英単語・そして英会話であった。そして学生時代に習った教養的英語はあまり現在では役に立たないというコメントもいくつか見られた。ただ、長文を訳すことにより辞書をひく癖が身に付いたという者もいる。また、現在幼児に英語を教える際、あるいは外国人教員などとのコミュニケーションにおいては直接役に立っているようには見えない教養的な英語を読むことも（短期）大学の役割の一つである学生の人間形成という点では忘れられてはならない要素である。

そして、将来幼児教育者になるためには学生（生徒）時代にどのような英語を学ぶべきだと考えるかの問いに対しては、発音やリスニングなども含めた英会話的要素を希望する声が圧倒的に多かった。その他幼児に英語を教える時に有用な子供向けの英語の歌、手遊び、ゲームを望む声も多かった。

短期大学の幼児教育学科の学生に対し、限られた時間内（週１回、90分）に教養科目として英語を教える場合、教養的側面を重視すべきか実用的側面を重視すべきかは非常に悩むことではある。もちろん理想的には、英語の講義時間を増やし、

教養的要素の英語を重視する講義と実用的要素の英語を重視する講義の両方を開講すればよいのではあるが、現状においてはそのようなカリキュラム上の余裕はない。現在の国際社会という環境と、何人かの学生は卒業後直ちに幼稚園・保育園などにおいて幼児英語教育に携わる可能性がある現実を考えると、そして、将来母親・父親として自分達の子供に対しても何らかの英語的ふれ合いをしてもらいたいという筆者の希望をも考え併せると、教養的要素も残しつつ、実用的要素を重視したシラバスに基づいた講義を行うのがよいであろうと現在筆者は考えている。また現在、幼児教育学科・看護学科・地域福祉学科と３学科体制である本学において英語の講義を全学科共通ではなく、学科別に開講している現状においては、それぞれの学科の特性に合わせた内容の英語を教授するのがよいと思われる。すなわち幼児教育学科においては、将来幼児英語教育を行うのに十分耐えうる英語の技量を学生に身につけさせることが必要であると思われる。

また、英語を教える者にとって、あるいは何を教える者にとっても大切なことは、その教えるものに興味を持ち、それを好きになることである。英語を教える側が自分も楽しみながら英語を教えれば、その姿勢は肯定的教育効果を生むのである。その意味では、現在の受験体制の中で、どちらかというと読み書き文法中心の英語を主に学習し、英語（外国語）を学ぶ、そしてそれを使って外国人と意思の疎通を図るという楽しさを知らないでいる学生も存在する。上に挙げたコメントにもそのようなものも見られた。したがって、幼児教育学科の学生に英語を教える上では、英語の楽しさを実感させることも大切である。

そのためには、日本人英語教員である筆者が責任回避をするわけではないが、ネイティブ・スピーカーによる英会話などの講義が外国人と英語を使って会話をすることにより、英語を話す楽しさ、そして英語を学ぶ意義の一つが実感できる機会として有効であると思う。学生時代の英語教育に望む内容の中に外国文化をというものがあったが、外国人教員から直接その出身国の文化を学ぶことは貴重な文化交流の経験ともなろう。

３．幼稚園・保育園における英語教育についての私見（まとめに代えて）

以上、本学の幼児教育学科の卒業生に対して行ったアンケートの回答をまとめ、それぞれの項目に対して、若干の感想・意見等を述べてきた。今回のアンケートは尋ねた事柄が、園での英語教育、外国人子女在籍にともなう諸問題、短期大学在学時代にどのような英語教育を行うべきかなど、かなり幅広くなってしまった。

卒業生からのコメントの中には「幼い頃から英語にふれさせるのはとてもよいことだと思います」という幼児英語教育に対する肯定的な意見も見られた。その一方幼児英語教育に対する批判のコメントもいくつか見受けられた。その中のいくつかを紹介しつつ論を進めていく。

- 早期教育よりも心情面を主とする教育をしていますので、このアンケートに協力できる答えができませんでした
- 小さいうちから一斉に英語を教えるようなことはしないでほしいというのが私の願いです
- 私はあまり早期教育というより広く浅くいろんなものに触れさせる方がいいような気がします
- 英語よりも遊び、社会勉強を発展させていきたい
- 幼児期の知的発達は遊びの中での直接的・身体的な体験から実現されていくのであって、いわゆる早期教育とは異なるのです。（中略）私は我母校で、ECC幼児コースの指導者になるためのような英語教育はしていただきたくないのです。「就職先の幼稚園で英語教育の指導者となる」ための英語教育なんてしていただきたくないのです。幼児教育者からの願いです。新見女子短大幼児教育学科卒業生からの願いです。今「心の教育」が盛んにいわれています。一人一人を大切にし、内面を読みとることの大切さが研究され実践されています。そして、教師の人間性が問われています。豊かな人間、幼児教育者になるための英語教育をぜひしていただきたいと思います。

これらのコメントに共通して感じられるのが、「早期教育」「英語教育」ひいては「早期英語教育」という言葉に対する「あまり興味を持っていない子供達に一斉に半強制的に英語を教え込む」というような回答者側のイメージである。また、英語を「勉強」ととらえ、豊かな人間になるための心情面の教育とは対峙するものととらえていることも感じられる。何人かの回答者が「英語教育」という言葉を聞き、そのようなイメージしか浮かべられないのは、我々英語教育者の落ち度であるのかもしれない。しかし筆者が英語教育に対して期待し、英語教育として実践しているのは、そのような狭い意味での知識としての英語のみを教えることではない。

筆者がまず、英語教育（本論でもあえてこの言葉を使い続けているのであるが）に期待することは、外国人と接する楽しさである。アンケートにも見られたのであるが、子供の多くは外国人の先生が来園し、一緒に遊ぶのを楽しみに待っている。子供達に対して直接のアンケートをとることは難しいので子供の直接の感想ではないが、保育者の目に楽しそうに映っている子供達はおそらく本当に楽しんでいるのであろう。子供達が興味を持つ楽しい遊びを取り入れることは、弊害がなければ積極的に行うべきことであろう。

先に紹介したようにある保育園では外国人指導助手に来園してもらい一緒にプールに入ってもらうという英語活動をしているということであったが、実は筆者は幼児期の英語教育は、プールでの水泳教育に似ていると考えている。水泳教育では幼児をまず、プールという人為的な水環境に入れ水に慣れさせることが第一段階であろう。そしていきなり泳がせるのではなく、まず水の中で遊ばせるであろう。英語教育でも同様である。まずは、英語の環境を作り、それに浸らせ慣れさせるのが第一段階である。そして、いきなり話をさせるのではなく、最初はその英語を使って遊ばせるのである。水泳教育の場合も幼いうちだと多少の危険や不安も伴う。だが、空気中とは違う体の動かしにくさ、浮力による体の軽さなど違った環境を楽しむこともできる。そして幼いうちに体でおぼえた泳ぎは、たとえ何年か泳ぐチャンスがなくても、体がそれをおぼえていて、久し振りの機会でも慣れればすぐに泳ぐことができるであろう。英語も同様である。英語という外国語の環境に対する不安や、母国語習得に対する多少のリスクもあるかもしれない。しかし、異なった言語や文化による違った環境を楽しむこともできる。そして幼いうちに体でおぼえた英語（の発音）は、たとえ何年かブランクがあったとしても、体がそれをおぼえていて、その時に身につけた英語をよみがえらせることができるのである[5]。幼稚園や保育園で子供をプールに入れる場合、その日どうしても気分が乗らなくて、あるいは水が怖くてプールに入りたがらない子供もいるであろう。そのような場合には、無理に子供をプールに入れることはしないであろう。そして、他の子供がプールで楽しそうに遊んでいる姿を見て、その子供もプールに入りたいと思うかもしれないし、それでも入りたがらないかもしれない。英語に対するアプローチもこれと同様でいいと思う。強制することなく、興味を持って英語の世界に入ってきたら受け入れてやればいいと思う。だから、コメントにあったように「一斉に英語を教える」ということはしない方がいいと筆者も考える。プールでの水泳教育も最終的には海や川などの外界で泳ぐことも目指しているが、幼児英語教育も最終的には国内外の実社会で英語を使うことを目指している

秋山和夫氏は「１週間に１～２度程度の外国語の学習は幼児、児童にとっては毒にも薬にもならないことを、大人は知っておくべきであろう」と述べている[6]。しかし、筆者は外国語学習は１週間に１～２度程度でも毒にも薬にもなりうる、そして毒よりも薬の面が多いのではないかと考える。確かに外国語を学ぶことによる母語の習得への介入の問題を指摘する論もあろう。しかし、限られた時間しか接しない外国語がそれよりもはるかに多く接している母語に与える影響はあまり大きなものではないであろう[7]。しかし、そうはいうものの、母語に対する外国語の何らかの影響が考えられないわけでもない。それを防ぐためには、外国語を孤立した単語としてではなく句として与えるのがよいであろう[8]。そして、驚くべき言語習

得能力をもつ幼児期に外国語に接することによる発音面における優位性は、ある程度の年齢を過ぎてから外国語に長時間接しても、なかなかネイティブ・スピーカーのような標準的な発音を身につけることが困難なこと[9]を考えた場合、「薬」の面であると考える[10]。

その他に、英語とそしてそれを話す外国人と接することにより、世の中には自分とは違う言語を話し、外見や価値観も異なる人がいるということを幼児期から実感できるだけでも「心の教育」になるのではないか。そして自分とは異なるものも認め、それを差別するのではなく尊重するという、ほぼ単一民族である日本人には欠けがちな、しかしこれからの時代を生きていくには絶対に必要な姿勢を幼い頃から養うことができる可能性を持った情操教育の一つともとらえることができるのである。自分たちと異なるものを排除しようという面を持つ陰湿ないじめの問題の解決にもつながる豊かな人間になるための心情面の教育ともなりうるのである。

したがって幼児期における英語教育は主に外国人と英語を使って一緒に遊びふれ合うことを目的に行うのがよいであろう。ただ、それを外国人に任せきりにするのではなく、日本人の保育者が補助をするといった形態が理想的である。多少人為的ではあるが、英語を使って外国人とふれ合う時間を作ってあげることは、これから国際社会を生きていく子どもには有益なことである。幼稚園・保育園に行くと子供は集団生活の中で社会性を養う。それを一歩発展させ、外国人と直接触れ合うことにより「国際社会性」と呼ばれうるものが養われるのではないか。 ある回答に「ネパールの子が園に来て、しばらく一緒に過ごした。クラスの子供にとって外国人と接して感じることは何かあるだろうし、肌の色の違い、言葉の違い、その他直接触れ合う新鮮で普段にない経験となったと思った」というコメントがあった。また別の者のコメントとして「外国の子と一緒に生活させることが大切であると思う」というものもあった。このように英語を教えに来る外国人であれ、クラスメートの外国人であれ、自分と異なる言語・文化・習慣などを持った存在と幼い頃に触れ合うことはとても有意義なことであろう。筆者はたまたま英語教育者であり、英語を中心に論を進めてきたが、上記の通り、それは英語でなくてもかまわない。

先に挙げたコメントに「英語よりも遊び、社会勉強を発展させていきたい」というものがあったが、英語教育は社会勉強でもあり、遊びでもありうるのである。また「早期教育というより広く浅くいろんなものに触れさせる方がいいような気がします」というコメントもあった。英語がその「いろんなもの」のひとつになれるのではないか。そして英語に触れることにより、世界が広がるのである。

以上これらのアンケートを通じて得られた卒業生からのコメントを読むと、幼稚園・保育園での現場における英語教育の場面をわずかではあるが垣間見ることができた。これらの現場からの直接の声を今後の本学での幼児教育学科における英語教育に生かしていきたい。本学の幼児教育学科では平成12年度よりカリキュラム改正により従来の「英語I」「英語II」が「英語コミュニケーションI」「英語コミュニケーションII」に代わる。単なる名称変更ではなく、内容もさらに充実したものにしていきたい。

今回のアンケートでいくつかの園より、事情が許せば園での英語教育の見学が可能であるという返事をいただいた。今後なるべく早い時期に、見学訪問をさせていただき、次の機会にはその報告をしたいと考えている。

＊この調査を行うにあたり平成９年度および平成11年度の新見女子[公立]短期大学特別研究費の援助を得たことに対し、ここに感謝の意を表したい。また、ご多忙中アンケートにご協力いただいた皆様、この原稿を読んでいただきアドバイスをいただいた本学幼児教育学科の衛藤吉則助教授にもこの場を借りてお礼を申しあげたい。

註

1．岡山県教育関係職員録編纂委員会『岡山県教育関係職員録 1995年度』，1995年
2．松香洋子『子供に英語をしゃべらせたい 児童英語教育、私の方法』東京：ＫＫベストセラー

ズ，1993. p. 4.

3．『児童英語教師ＢＯＯＫ 2000年度版』東京：アルク, 1999. p.30.

4．この点については、『備北民報』1996年５月１日版に掲載された筆者へのインタビュー記事「シリーズ教育講座 Let's play in English, Mother. 英語で遊ぼう、お母さん 英語教育は幼児期から」を参照のこと

5．池田和子氏はその著書『三つ児の英語百までも』（東京：グラフ社，1986） p.27において、「ごく幼い時期に頭の中に入った記憶、特に耳から入った音は、けっして消えることはなく、大脳の片隅に、しっかり留まっていると証明されているのです」と述べている。

6．秋山和夫「私の提言・私の発言 幼児・児童の英語教育」『山陽新聞』1998年 3月22日

7．東後勝明氏はその著書『子どもの英語いま、こんなふうに』（神戸：BL出版，1998） p.163において外国語の習得が母語の習得に与える影響について「子どもがまだ日本語も完全にできないうちに、英語を聞かせたりして本当に大丈夫なのかという質問もよく受ける。たとえ英語が習得できたとしても、頭の中で混乱はしないのだろうか。日本語の習得に何らかの影響があるのでは？このあたりがよく問題になる。あくまでも私見だが、私は大きな混乱も影響もないと思う。子どもは三歳頃になると日常的なことはたいていのことが話せるようになっている。その頃にもうひとつ他のことばと接触させると、それを並行して覚えていく」と述べている。また、池田氏は前掲書 p.28 において「母国語と外国語を同時に耳から入れることに、恐れや疑いを持つことはありません。幼児には、大人にはない不思議な能力が潜んでいて、日本語と英語が頭の中でごちゃごちゃになるということはありません」と述べている。両氏とも外国語の習得が母語の習得に与える影響や混乱を否定している。

8．この方法は旧ソビエトで行われたということで、福沢周亮著『幼児の言語』(東京：日本文化科学社, 1978) pp.158 - 161 において紹介されている。

9．東後氏は前掲書 p.82において「英語を早期に習わせる最大の利点は、正しい発音が習得できることにある。英語に限らず外国語習得において、幼児・児童期を逃すと、正しい発音の習得はまず不可能に近い。私自身が、今もそのことを痛切に感じている」と述べている。

10．筆者はここで、いわゆる日本語的発音の英語を否定するわけではない。それは世界の英語の一つとして十分存在価値があるものである。ただ日本語においても方言のみではなく、標準語も使え、両者を状況に応じ使い分けられたら便利なように、英語でもネイティブ・スピーカーのようないわゆる標準的発音の英語（これにもいくつか種類があるのではあるが）も身につけておいた方が有利である。

資料１

幼稚園、保育園での英語（教育）への取り組みについてのアンケート

（＊差し支えのない範囲でお答えください）

・あなたがお勤めになっている（なっていた）幼稚園、保育園名

・所在地

・園名　　立　　幼稚園・保育園・その他（　　）

・対象年齢　　才　～　　才

・園児数

・外国人の園児数およびその国名

・教員・保母数

・あなたのお名前および卒業年　お名前（　　）　年３月卒業

・あなたがその園にお勤めの期間

・貴園での英語（教育）の現状はいかがですか。一番当てはまるものに○をおつけください。

（　）積極的に取り入れ、それを園児募集の際などの売り物にしている。

（　）活発に行っている

（　）定期的に行っている。

（　）不定期的に行っている。

（　）ただいま検討中である。

（　）関心はあるが、まだ取り組んではいない。

（　）関心がない。
（　）その他（　　）

・英語（教育）を、貴園にて取り入れている場合、具体的にどのようなものですか。なお、英語教育といってもあまり本格的なものばかりではなく、英語にふれることを目的とするもの（例えば英語の歌を歌う、英語のビデオを見る、英語の絵本などを教室に常置するなど）も含まれます。

・貴園では、どのような方が英語を担当していますか。当てはまるものに全て○をつけてください。
（　）園長
（　）幼稚園教員
（　）全員　（　）英語の得意な方のみ
（　）保母（保父）
（　）全員　（　）英語の得意な方のみ
（　）外国人教員
　　国籍はどちらですか（　　）
（　）外国人ゲスト
　　国籍はどちらですか（　　）
（　）園外より招く日本人の英語教師
（　）父母
（　）その他（　　）

・英語を取り入れた場合の子供たちの興味・関心・反応はいかがですか。

・英語を取り入れる際に、苦労する点などありましたらお書きください。

・教材等をお使いの場合はその教材名をお書きください。

・その教材についての感想などをお書きください。

・どんな教材が望ましいですか。

・普段、ご自分で英語をどのように勉強していますか、あるいは英語とどのように接していますか。（あなたが英語を担当している、あるいは将来担当する可能性がある場合）

・学生（生徒）時代に習った英語で役に立っているのはどんなことですか。
（あなたが英語を担当している、あるいは将来担当する可能性がある場合）

・将来幼児教育者になるためには、学生（生徒）時代にどのような英語を学ぶべきだと考えますか。

・どのような条件が満たされれば、貴園は英語教育に取り組み始めると考えますか。（英語教育に関心はあるが、現在英語教育を取り入れていない場合）

・外国人の子ども（親）と接するときに使う言語（外国人の子どもがいる場合）

・外国人の子ども（親）とのコミュニケーションで困る点。

・その他、関連することで何かございましたらお書きください。

・なお、事情が許せば見学訪問を受け入れていただける場合は、連絡先をお知らせください。

・ご協力ありがとうございました。データは有効に使わせていただきます。また、プライバシーの保護については、最大限に配慮いたします。　　山内　圭